第１分科会

日　時：12月13日（土）14:40～16:20

会　場：みえ県民交流センター　イベント情報コーナー

先駆者と語ろう～10年継続するＮＰＯ法人の極意～
ＮＰＯ法人設立・運営の悩みや課題

■概要

私たちは、ＮＰＯ活動を取り巻く様々な課題や困難に直面しながら日々活動しています。ＮＰＯ法が施行されて 10 年。これまで活動を続けられてきた先輩ＮＰＯは、どのように苦難を乗り越えてこられたのでしょうか。先輩方の経験に学び、課題解決へのヒントを得て、これからのＮＰＯは、どのように行動していくべきなのかを一緒に考えます。

■タイムテーブル

14:40 ～ 14:40	1 分	趣旨説明
14:40 ～ 15:10	30 分	活動紹介　①ＮＰＯ法人赤目の里山を育てる会 ②ＮＰＯ法人市民福祉ネットワークみえ ③ＮＰＯ法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンター
15:10 ～ 16:05	55 分	ディスカッション「10 年継続するＮＰＯ法人の極意」
16:05 ～ 16:20	15 分	メッセージ

■出演者プロフィール

伊井野雄二（いいの　ゆうじ）　ＮＰＯ法人赤目の里山を育てる会理事長

鳥取県生まれ。日本福祉大学Ⅱ部社会福祉学部を卒業後、赤目養生診療所事務長、赤目カントリークラブ建設反対市民の会事務局長を歴任する。1996 年に赤目の里山を育てる会事務局長に就任し、1999 年には、法人格を取得し、三重県のＮＰＯ法人認証第１号となる。同年、（有）エコリゾート代表取締役に就任、2003 年には、通所介護施設デイサービス赤目の森を立ち上げる。里山の保全と育成を訴える「里山の伝道師」として活躍中。現在、社団法人日本ナショナル・トラスト協会理事、名張市赤目小学校非常勤講師ほか。著書に「里山の伝道師」、「成人病に克つ 86」。

大西　良太（おおにし　りょうた）　ＮＰＯ法人市民福祉ネットワークみえ理事長

三重県浜島町（現在の志摩市）生まれ。雑誌編集部記者を５年、商社勤務 10 年を経て、1989 年に伊勢まごころを立ち上げ、助け合いの精神に基づいた福祉サービスを始める。1999 年５月にＮＰＯ法人格取得。困ったときはお互い様をモットーに、24 時間 365 日、高齢者、障害者にサービスを提供する一方で、1997 年に在宅福祉ネットワーク三重を設立。2003 年にＮＰＯ法人市民福祉ネットワークみえとしてＮＰＯ法人格を取得し理事長に就任する。三重県社会福祉協議会評議員、法務省人権擁護委員、ＮＰＯ法人全国市民福祉団体全国協議会理事、ＮＰＯ法人全国移動ネットワークサービス理事ほか。

野口あゆみ（のぐち　あゆみ）　ＮＰＯ法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンター事務局長

三重県伊勢市生まれ。高校卒業後、地元タウン情報誌「しんぷる」編集部を４年勤めたあと、実家の花屋を手伝いながら夜は姉が経営するワインバーでアルバイト。その合間を縫って、フリーライターとしてタウン誌やＪＴＢ旅の情報誌「るるぶ」などにも執筆。2000 年３月に現在夫のチェアウォーカー青年との出会いをきっかけに「伊勢・鳥羽・志摩ガイド　おでかけチェアウォーカー」発行発起人として、バリアフリー活動を始める。2002 年に三重県の特異プロジェクトである「伊勢志摩再生プロジェクト」事業の一環として立ち上げた伊勢志摩バリアフリーツアーセンターの事務局長に就任。現在鳥羽駅前ビルの１階に事務所を構えるツアーセンターにてお客様の対応、伊勢志摩のバリアフリー観光の促進と PR 活動をおこなう。

■ 進行役プロフィール

山本　康史（やまもと　やすし）　ハローボランティア・ネットワークみえ

オープニング「三重県のこれまで」参照。

■　第１分科会まとめ

第１分科会は、これまで活動を続けられてきた先輩ＮＰＯの方々に、活動してきた中で遭遇した困難・感じた問題意識などをお話いただき、これからを担っていくＮＰＯに向けて力強いメッセージと活力をいただきました。

（パネリスト）

ＮＰＯ法人赤目の里山を育てる会　　伊井野雄二さん
ＮＰＯ法人市民福祉ネットワークみえ　　大西　良太さん
ＮＰＯ法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンター　野口あゆみさん

それぞれが、運営していく中で印象に残った出来事・課題・問題意識・意見

・ＮＰＯとして、ジレンマがある。行政が行う事業について、よくアドバイスを求められるが、予算が付いていない場合が多い。アドバイスしてあげたい気持ちと、安定したサービスを「継続」するための対価とのジレンマに悩まされる。

・これまでの 10 年を引っ張ってきたようなリーダーシップと個性のある後継者は、なかなかいないのが現状ではないか。今まで、一人でやってきたことを 5 人・10 人で行える様な仕組みづくりを行っていかなければならないと感じている。

就職先として、ＮＰＯが選択できるような環境を作りたいという気持ちが大きいが、自分の給料で代わりをしてくださいとはとても言えない状況である。

・「参加」の感覚を行政職員も持って欲しい。自らが、主体となることで他の手本になる。

・ 法人として新規に事業を起こそうとした際に、理事会が紛糾し全ての理事が辞任したことがあり、民主主義の怖さを知ったこともあった。

・小さな団体でいいから三重県中どこにいってもある、そういうネットワークを作っていきたい。

・ 300 万円～500 万円の財政規模のＮＰＯ法人を今後いかに育てていくか。行政の支援を始めとして、アイデアをみんなで提案しあうことが非常に大事なことだと思う。

会場に向けてのメッセージ（市民はこの 10 年で変わったのか。10 年間継続する極意とは）

・自律した市民社会の形成は、10 年ぐらいでは成しえない。まだまだ「住民」が多い。

・行政がお金の配分を変えれば、もっと市民は育つ。

・市民は変わってきたように思う。行政も、今まで縦割りだったのが少しずつ変わってきている。市民活動団体が、うまくマスメディア等を利用していくことで、市民活動の理解が深まり自然な形で活動に参画してもらうことにつながる。

・「気づき」から、みんなで行動を起こせるようになればまちはどんどん良くなるし、世の中も豊かになる。

・自分たちの行う事業が、全国の基準・モデル事業になるという意識を絶えず持つことが熱意の継続につながる。自分のフィールドを見つめなおす中で、新しい事業展開というのは次々と出てくる。

■　開会(趣旨説明)

[山本]　よろしくお願いします。まずこの分科会の目的を簡単に紹介させてもらうと、「先駆者と語ろう」ということで、ＮＰＯ法人活動を10年以上やっていただいた3人に来ていただいたので、このみなさんにＮＰＯ法人をやってきてどうだったのかというところとか、運営する中での悩みとか解決したい課題など、そういったことをＮＰＯを立ち上げたばかりか、これから立ち上げようとしている人たちとともに、ヒントになるようなものを見つけていく時間にしたいと思っていますのでよろしくお願いします。進行は山本がさせていただきます。よろしくお願いします。せっかくなので、最初のうちあわせにはないんですが人数がこの程度ですから、参加されたみなさん一人ずつ短くで結構ですので、どういう立場で今日は何を聞きにきたのかということを一人ずつ自己紹介していただきたいと思います。それを聞いてから三人のパネリストのみなさんにお話をしていただこうと思います。

[参加者自己紹介]

[山本]　では、参加のみなさんの自己紹介を終わりましたので、今度はそのみなさんの疑問に答えていただける三人のみなさんに自己紹介を兼ねてこの10年間の活動を簡単に紹介をしていただきたいと思っています。おそらく活動紹介をそれぞれに任すと2時間くらいしゃべってしまうだろうと思ったので、10分という依頼をさせていただいていると思いますので、申し訳ありませんがみなさんの活動を簡単に伊井野さんから紹介をお願いします。

■　活動紹介

ＮＰＯ法人赤目の里山を育てる会

[伊井野]　赤目の里山の伊井野です。赤目の里山を育てる会については資料を読んで、いろんなことをしているんだなぁと思っていただいて、それで、そこそこ大臣表彰なんかも受けて結構かっこよくやってくれてるんだなというふうに思ってくれたらいいです。ＮＰＯの取り組みが県のほうで始まったのは別の事務所のときで、私の団体はＮＰＯの認証の一号団体なんですが、10年前の12月1日の朝6時に行きましたら、何を間違えたのか守衛さんが私に鍵を渡すので、守衛さんは私を臨時の職員さんと間違っていたみたいで、一号認証を取りたいために行ったら誰もいなくて、その時は6時に行かなくても良かったんですが。それで職員さんが来るのを湯を沸かしてコーヒーを入れて待ってたんです。そういう経過はここでしか聞けないわけで貴重ですよね。それで一号を取ったから名誉ある一号になってくださいってずっとその職員の方は言い続けていたので、今のところ10年間ちゃんとそれなりには立派な団体で運営をしてきたというのはあります。それで先ほどの質問って強烈だったんですけどね、三越の社長が解任されたのと同じことが赤目にもおきました。これはインターネットのホームページの中の議事録にもあげていますから誰でも見ることができる情報にしていますが、赤目の里山を育てる会でデイサービスをやるかやらないかということで結構すったもんだしまして、当時理事が12人くらいいたんですが、デイサービスをやる派が少数で反対が多数で、事務局長解任決議みたいなのが出かけて、というよりデイサービスをしないという決議がおこり

かけてものすごく大変な時期がありました。基本的にＮＰＯというのは理事が 3 人で団体を構成できるわけですが、大勢の理事さんに囲まれていいなぁと思っていたんですが、ＮＰＯとして事業として生き残るということを幹部が絵を描いたことが運営の理事の中に十分に浸透できなかった。早くそれをしないと組織がもたないというような、どんな歩みをしていくのかというようなことでは見解が異なったということがありまして、非常に大変な時期がありました。今から５年くらい前ですかね。実を言うとうちがデイサービスをするようになったのは、隣の大西さんのところがきっかけで、大西さんのところに行ってデイサービスを山の中でやりたいんだけどといって、大西さんにも赤目にきてもらっていろんな指導を受けて、赤目しかやれないデイサービスをやりますのでというような協力を得て、提案したんですが、そういう組織内が非常にガタガタして環境保護団体なのにデイサービスというのは別の団体かもしくは有限会社ですればいいじゃないかという議論がおこって、私もどうしようかなというふうなことがありました。多くのＮＰＯではあまりそんなことは赤裸々に明らかにはならないだろうけども、みんなと一緒にものを判断するということを怠るとそういうような事態にもＮＰＯとしてなっていくんだなということを、身をもって体験しました。それは全員の理事が辞任をして、赤目の里山の理事として残ったのは理事長しか残らないという状況で、もう一度理事を募ったときに誰もいなくて、これでは運営できないから会をつぶすかどうかという瀬戸際まできて、事務局の伊井野さんは責任を持ってやらなければいけないからもう一度理事に復活しなさいという話の中で、わかりましたということでもう一度理事に戻って、新しい理事を選任して立ち上げて、それで理事会で決議したデイサービスの事業を復活させるということをもう一度新しい理事会でやり直して、今に至っているわけです。民主主義というのは本当に大変だなあというようなことを身をもって感じました。多数決ということの素晴らしさと怖さというものを身にしみて思っていますので、この 10 年間、もう 12 年になりますがなかなか大変だったなと思っていますが、僕の判断は間違ってなかったなと思うのは、今やっとデイサービスの事業がそれなりに軌道に乗って、その安定した状況の中で里山の保全活動というのをできるようになったというのが正味のところです。もう近々また新しいご報告がみなさんにできると思うのですが、今街路樹の剪定したものを新しい燃料にしようということを行政のほうに提案しましたら、行政も一生懸命になって今までかかってきた税金で処理していた費用をできるだけ減らしたいという思いもあって、それで赤目の里山を育てる会が一般廃棄物の処理場の資格を取ってくださいという話になって、それは費用もあまりかからないということが明らかになって、自治会と市役所と赤目と今まで処理をしてきた企業がみんな寄って、名張の街路樹を有効に使う会議みたいなものに発展しそうなんです。赤目の里山は廃棄物の処理場の反対でナショナルトラストという運動をやったにも関わらず、10 年たったら今度は自分たちが廃棄物の処理場業者になるというのもなんだか因縁めいていて面白い取り組みだなあという話とおもいます 。とにかく自分たちのフィールドをずっと見つめなおす中で新しい事業展開というのは次々と出てくる。例えば教育しかり、文化しかり、芸術しかり、そしてまちづくりしかり、最後に全体としてはやはり環境団体というのはまちづくりの主体にならなければいけないというのが、この 12 年の僕の概括する感想だというふうにいえると思います。とりあえず以上です。

[山本]　ありがとうございます。それでは次は大西さんお願いします。

ＮＰＯ法人市民福祉ネットワークみえ

[大西]　みなさんどうもありがとうございます。この 10 年継続するのに呼んでいただきまして。最近よく考えてみたら、これをもらってから、まあＮＰＯ法人としては 10 年なんですが、天皇陛下が亡くなられたとき 1 月 7 日ですけど、その 1 月 5 日にこれを初めてしたんですよね。ですからあと 10 日ぐらいするとまるまる 20 年になるようなことで、そうやって言われてみると 10 年ってそんなに大変なことなのかなと逆に思ったような次第でございます。しかし最近のＮＰＯは元気がありませんし、10 年といいますが長ければいいというものでもないですし、何を話していいのか悩んでいます。自己紹介ということで、私 47 年生まれで今 61 才です。趣味はバードウォッチング。バイクに望遠鏡と三脚ぶらさげて日本国中遊びまわっています。そんなことをしているわけですが、学校を出てこの世界とは全く縁の遠い雑誌の編集のほうをやっていまして、雑誌の編集から商社へ行って、商社からこの仕事に首を突っ込むようになってしまったのが運のつきで、今になっています。

雑誌の編集のときに昔の人なら知っていると思うんですが、マグロの水銀問題というのがあったんです。水銀汚染の問題。それを編集長から取材しろといわれマグロの水銀を求めて日本中の港を駆け巡ったわけなんです。そうこうしているうちにマグロの水銀というのは毛髪を調べるとすぐにわかるらしいんですが。どこへ行ってもマグロの水銀問題というのは、アメリカのＦＤＡ（アメリカ食品医薬品局）から指摘されたんですが、それの被害実態というのは全くないわけなんです、日本中探しても。それで商社へマグロの水銀の件を取材と、方向を変えてみました。そうしたらそんなものあるわけないだろうということで、そんなにマグロのことが知りたいならうちへ来んかということで雑誌の取材から世界各地のマグロを買い付けする仕事に就きました。それで世界中のマグロの基地を買い付けに回ったんですけども、一番短いところは数ヶ月、長いところだとパプアニューギニアに 4 年半おりました。

パプアニューギニアにいてるときに日本から電話がかかってきて実家から、母親が入院したんだというようなことで、それで参ったなと思いまして帰ったんです。それで僕のうちは三人兄弟でこんなご時世ですからみんな共稼ぎで、母親が入院してもそれを手伝う人がいないんです。今みたいに社会的入院は認められないという状況ではなくて、病気が治るまでずっと継続病院が可能でした。しかし家族介護者が居ないので毎月家政婦さんに依頼しました。当時で 20 万から 30 万かかりましたね。始めの二ヶ月や三ヶ月は払えるんですが、これが 1 年 2 年となってくると大変ですよ。お金ですから兄弟喧嘩は起こってくるわ、夫婦喧嘩はおこるわで。それでそのときに考えたんです。これは何かしないといけないなと。それで僕が雑誌社から商社に移ったのも簡単だったんですが、これもまた簡単で、じゃあオレが何とか金のかからないシステムを作ってみようじゃないかと思いまして、それで会社を辞めて自分ひとり助け合いの会を。この世界に入ったのはこれがきっかけです。

それでやり始めて思ったことは…。まだいっぱい話すことがあるんですが、僕が何をしたかったかというと日本の結いの制度ですよね。あれをもう一度実現したい、そのためには助け合いというのをやっていかなければいけない。地域通過というのもやりました。地域通過というものも僕は結いの制度を復活させる一つの手段だと理解しています。これが大体の僕のスタートです。

ところで行政はどうか。行政は変わってないんだよね。三重県は県民しあわせプランの中で新しい時代の公なんてことを高らかにうたっているんですが、この新しい時代の公の中には当然ボランティア、市民力というのは入ってくるはずなんです。市町の方にいくとそれは何の話やという行政職員もたくさんいます。これが三重県の実態ですよね。ですから真の意味で自治体が変わってください。お願いします。

[山本]　続いて野口さん。

ＮＰＯ法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンター

[野口]　パワーポイントを使わせていただいて活動の説明をさせていただきたいと思います。先ほどからみなさん 10 年継続したっていう話をされているんですが､実はうちまだ 10 年も続いてないんです。まだ 7 年目くらいなので四捨五入したら 10 年とおもってもらったらいいんですが、四捨五入しても困るときもあるのでとりあえずお招きいただいたので､10 年ではないですがうちのセンターの活動の紹介をさせていただきたいと思います。先ほど私個人の自己紹介のほうは 10 ページのほうに書いてあって､先ほど大西さんが言っていたときに雑誌編集者をしていたというときに私もそうだったので、そういう傾向にあるのかなと思って統計をとったら面白いかなと思いました。ではうちの説明をさせていただきたいと思います。ＮＰＯ法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンターの事務局長をさせていただいてる野口あゆみと申します。もしかしたら名前のほうは聞いたことがあるわという方もいらっしゃるかもしれないですが、どんな活動をしているか。センターのほうは 2002 年に設立しました。先ほども少し知事の名前が出ていましたが、前の知事の本当に特異なプロジェクトで伊勢志摩再生プロジェクトというのが実はそのころできていたんですね。そのときにその事業の一環として名前のごとく伊勢志摩の観光を再生させるための事業の一つとして、このバリアフリーツアーセンターというのを設立しました。なぜそのセンターで私が働きだしたかというのもこの自己紹介のところに載ってますので追々またお話させていただきます、長くなりますので。それでツアーセンターを設立したのは 2002 年なんですが、今現在鳥羽の駅前の一番街というビルのみやげ物屋さんがいっぱい入っているビルの一階にあります。ですので、その中に混じってありますからただの観光案内所に思われがちなんですが、実は簡単に言いますと、伊勢志摩にいらっしゃる障害者や高齢者観光客の人たちが伊勢志摩に行きたいけれど車椅子で泊まれる宿ってあるかなとか、水族館に行きたいけれど車椅子で行けるかな、視覚障害者の人をガイドしてくれる人がどこかにいるかなみたいな、いろいろ旅行に関しての不安ごとがあると思うんですが、そういったことをセンターに問い合わせていただいたら、実際地元の障害者が見に行った情報、宿泊施設も観光施設やスポット、サービスなどいろいろなことを提供できるというセンターです。ですので観光案内所に思われがちなんですけど言ってみれば観光協会のバリアフリー版だと思ってもらって結構だと思います。組織自体は理事長がいて、理事が 6 人います。それで事務局長、私なんですがそのほかにスタッフが私を含めて 3 名いますが､専門員というメンバーが 40 人ほどおります。それは地元の障害者であるとか、こういったボランティアに関して協力していただける方ですね。先ほど調査をするといいましたが、

その調査をするにあたって実際にじゃあ何月何日にどこどこ旅館に調査に行くんですけど来れる人いますかというと、専門員が私が行きますということで言っていただいて、だいたい５名くらいで調査をしに行きます。旅館とかによると大変大きいので結構一日中かかることもありますので、そういうメンバーであるということですね。それで私たちの事業の方はというと先ほども言いましたがバリアフリー観光の情報の発信と収集ですね。発信するからには収集しないといけない、収集したからには発信しないといけない、このあたりが多分私の以前していた仕事の雑誌の編集の力というか、持っていたところだと思うんですが。

あとバリアフリーの評価ですね、旅館とか観光スポットなどに行ってバリアフリーの状況を把握するという。これ評価というとみなさんたじろいでしまう企業とかがあるんですが、評価と言うよりありのままの情報をお伝えしたいということがあり、どうしてもバリアフリーになっていないから行けないとか思われそうですが、後から出てきますが私たちの基準からすれば実際現場がどうなっているかというのを知りたいというのが実際障害者や高齢者の人たちである。それを見て、行けるか行けないか判断するのは行く人である。私たちが判断するのではなく行く人たちが情報を収集して、これなら私が行ける、これならおじいちゃんも行けるということを判断してもらう材料を調べに行くということです。

あと観光地のバリアフリー化その他モニターツアーやアクティビティのイベントなどをさせていただいて、あとはこういう講演活動や、視察の受け入れなどを有料で。運営費ですね。させていただいています。それで先ほど言いました具体的に写真を見てもらいたいんですが、バリアフリーの観光情報の発信ということで、地元のメンバーがこういう車椅子や、まぁ車椅子は乗せてしまっているのであれですが、実際視覚障害者や聴覚障害者のメンバーもいます。そういったメンバーと実際地元を見てくる。それで地元を知ることによってまた新たに発信する側としてこんなところが良かったよという、行ったことによって伝えられるということがあると思います。そういうことを発信しています。あと評価、こういうふうに何センチかまで測りますね。これが最初の頃は嫌がられていたんですが、みなさんもご存知かもしれませんが車椅子の方って手動のものも電動のものもありますし、この測っている長さが５センチのところがバリアだと思う人もいれば、こんなのへっちゃらという人もいます。ですのでそういったところを詳しく調べて、実際見て情報提供したときに、それなら私はいけますということをお伝えするようにしています。あと観光地のバリアフリー化ということで先ほどもお話があったんですが、企業との協働ですね。これは地元の旅館との協働でバリアフリールーム、ユニバーサルルームを作りました。みんなが集まってそのときも車椅子、視覚障害者、聴覚障害者みんな集まってどんな部屋を作っていくかというんですが、ここでかなり想像のとおりの大バトルが繰り広げられるわけなんですが、けっこうそれをとことんまで突き詰めていくと、本当のみんなの思いやり、譲り合いから始まるユニバーサル的な施設になっていくということで、大変みなさん喜ばれましたし、できてから私たちもすごく意識が高まりました。企業と協働するという事は私たちもすごく責任を負うことになります。お金がかかって、この回収した金額で例えば５年で回収する。そのためにいくらでこの部屋を売るという具体的なお話を企業側から聞かせてもらうので、そういうことをガンと聞かせてもらうので私たちも頑張らなくちゃという気になります。もちろんバリアフリー化というのはよくあるし、この右下におじさんが掲げているの

なんかは地元のもともとあるボランティアなんですが、そういう観光のガイドさんなんですけども例えば視覚障害者の方がちょっと案内してもらいたいと言ってるということを言ったら、こういう触地図ですね、触ってこれ実は黄緑色と白いところに少し段差がありまして、触るとどんなふうな地図になっているのかというのが見ていただく、今見ている光景はこんな光景なんですよということを見てもらうようなのを自ら、私たちが何も言わなかったんですがこんなものを作ってみましたということでガイドの人が作ってくれました。そういうような地元の人たちにも恵まれて大変ありがたいなと思っています。あとモニターチャートとアクティビティのイベントというのが、伊勢の人ならご存知だと思いますがお木曳きですね。障害者、高齢者の人たちってなかなかそういう祭りなんかに参加するっていうのは難しいことなんですが、やはりこういうのをやりたいという声があがってきたので何とかできる環境を作ろうということで、交渉してさせていただいたりとか、磯体験というこういう水の上を浮いてますけれど、この車椅子、こういうのをやってみたいという人が出てくれば私たちもこういうのをどうやったらできるのかということをみんなで話し合いながら作っていったりしています。伊勢志摩で泊まれるとか、食べれる、遊べるだけじゃなくて、やっぱり伊勢志摩に来ないとできないというものを作っていかないと魅力的な観光地にはならないことですね。ここに書いてあるように今までは障害者の旅行自体なかなかなかったわけですが、いけるところを探していたんですね、今まで。ではなくて、これからは障害者の人たちの行きたいところへ行けるように開拓していかなければならないということで、先ほども言わせていただいたバリアフリーというような情報提供というのはあくまでも手段であって、私たちが言っているのはその伊勢志摩に行きたいという魅力を、まず最初に前面に出していかなければ結局は全国各地にたくさんある観光地の中で伊勢志摩を選んでもらえるというのが一番重要なんですね。そのときに、じゃあおばあさんを連れて行きたいんですけどもといったときに、バリアフリーの情報がすぐに提供できるというふうにしておけばお客さんを逃さずにすむということですね。そういうところを作っていきたいと思っています。それで障害者、高齢者の人たちというのは本当にさまざまな状態をお持ちなので車椅子の方だからここであろうとか、視覚障害者の方だからこんなところが楽しいであろうとか憶測で情報提供するのではなくて、お客さんが本当に行きたいと思っているところをきちんと、先ほども言ったように祭りに参加したいといのであればそういうものを提供していくというようなものを可能にしていかなければいけないと思っています。このシステム図とか言ってると時間がなくなってくると思うので。こういうレンタル車椅子というのも 6 年 7 年してきますと、お客さんからのニーズでいろんなサービス提供をしてくださいというのが出てきますので、それが大変私たちも刺激になっています。今までは施設で車椅子の貸し出しをしていましたが、これは伊勢志摩に来ましたら伊勢志摩のどこでもレンタカー感覚で車椅子の貸し出しができますよということです。あとこれは大々的には言ってないんですが、神宮のボランティアですね。みなさんもご存知のようにこういう石段があったり、砂利道が 800 メートルあったりとかするようなところを神宮は車椅子の貸し出しをしているんですが、それを介助する人がいないというときにサポートボランティアを実施したりとかも行

いました。最近出てきているのが旅館へのヘルパー派遣ですね。これは大西さんとかにもいろいろ相談させていただいたりしましたが、最近はデイサービスでお風呂に入っている、または

施設に入っているおじいちゃんおばあちゃんを連れ出して旅行に行きたいというようなご家族もいらっしゃいます。ヘルパーさんを利用してお風呂に入ってる方たちもいらっしゃるので、そうなると旅行に行くということになったときにお風呂に入れるの誰？ってなるんです。家族誰も介助できないとなるので、そうなったときにこういうヘルパー派遣があると大変ありがたいわと。現場から連れて来る方もいるんですけど、すごく莫大なお金がかかるので現場で一時間ほどのヘルパー、もちろん保険は利かないのでだいたいその実費分を払ってもらうという形でとっています。そういうようなこともちょこちょこはじめていって、本当に継続すればするほどこういうサービスというものを提供していく、きちんとした安定したサービスを続けていかなければいけないなということをすごく実感しておりますので、そういったところが今後の私たちの課題でもあるのかなと思っています。10 分たってしまったのでこんな感じかな。あと駅のボランティア観光案内とかしたり、最近は教育で地元の学校で授業をしたりしています。早足になってしまいましたが、ちらっと見たものでまたご質問があればよろしくお願いします。以上です。

[山本]　ありがとうございました。だいたいこういった人たちがみなさんのご質問に答えていただけるということになりますので。あとは別にシナリオは作っていませんので。先ほどの自己紹介でも聞きたいことというのをいくつかお話いただきましたが、その中からとくにこれだけは聞いておきたいというお話をみなさんの中から聞いていって、質疑の時間、残り１時間くらいゆっくりしていきたいなと思います。まずこれを聞きたい、こういうところでどなたかといっても手を上げないんですが、そこで手を上げようという勇気のある方はいますか。

■　ディスカッション
１０年後の実感とジレンマ

[伊井野]　10 年たって何が変わったかというと、やっぱり 10 年一昔って昔の人は言ったもんだなと思いますね。事業が安定するということとイコールなのかどうか判断をしかねてますが、ＮＰＯセクターとして食っていけるなという実感が最近とくにしていますね。中堅の行政職員とこの間 1 時間くらい、行政職員の悩みを聞いてあげようみたいなのでちょっと聞きましたら、税金右下がりで、課題山積で、それで 20 万 30 万の事業をやるだけで上からも下からもいろいろ言われて、モチベーション低下して行政職としてどうやっていこうか悩んでるって。そこで思ったのがＮＰＯに来たらという気持ちがやっぱりしました。というのは、僕はＮＰＯを 10 年やれてきたのは公的なお金、企業のお金でもある意味公的なお金だと思うんですが、その公的なお金を使って、自分たちのミッションに近い事業を自分たちのアイディアでできるというその魅力で 10 年頑張れたと思うんですね。まだ正式には集約していませんが、10 年で赤目の里山を育てる会は事業総額で 1 億円超えたと思い

ます。真水でいうと 6 千万くらいとってきたんじゃないかと思います。真水というのは、税金とか各企業のお金。つまり 4 千万は自分で出したという意味ですが、最近助成金を出すと通りやすいんですね、感覚として。通りにくい時期もあったんですけども。というのは僕の判断は助成金疲れしてみんな出してないんじゃないかなという感じがして。そして知恵と度胸さえあれば、そこそこコンスタントにいろんなお金がとってこれて自分のやりたいことをこんなに自由にのびのびできるということはないんじゃないかなと思うので、行政職のそれなりの能力を持った人はＮＰＯに転勤して、まぁ子供が中学校以上になってからにしてください。そうしないとちょっと家庭がやっていけないかもわかりませんので。僕は本当にそう思います。行政で能力を発揮できないんだったらＮＰＯにきて能力を発揮するべきだと本当に思って、三重県の人にはわかるかなと思って今言ってるんですが、この間静岡で行われたＮＰＯ自治体フォーラムで言ったらひんしゅくをかいまして、みんな冷たい目で見てたんですが、来年は大西さんが行ってもっと茶化したらいいなと思っていますが、なんか最近そんな感じに思っています。

[山本]　そんな感じを聞いて、大西さんはどういう印象を今もたれましたか。

[大西]　いやぁ、参ったな。いろいろ問題ありましたね。ただこの 20 年を振り返ってみまして、8 年介護保険やってきました。それで 10 年 10 年ですよねそれで会員数を見てみると、この介護保険が始まるまでは会員数が 750 名だったのが介護保険になってから 250 名に激減。原因はそれを説明していると長くなりますので割愛しますが、介護保険になってから利用者も協力者も変わりましたね。というのはお金が本来の威力を発揮し始めたわけです。例えば助け合い（ボランティア）だけやってるときでも、夜中に利用者から依頼がくるケースってありますよね。そのときに有償ボランティアの人にあそこのおばあちゃん、オムツ交換に行ってくれないかといっても、夜中の話ですよ。助け合いのときは、じゃあ私行ってくるわと必ず軽い気持ちで言ってくれた。介護保険になったら殆どが、私忙しいからできません。介護保険制度が始まったときに会は紛糾しました。介護保険しようか、それとも参入するのやめようかというのでかなりもめたんですが、お金の魅力には勝てなかった、負けてしまったわけなんです。それで介護保険事業者になったら自分たちが今まで助け合いでしていた活動がお金になるということがわかってきたんです。有償ボランティアでは、うちは 1 時間 650 円でしてきたんですが、介護保険だとうちは 1500 円なんですよね。650 円と 1500 円じゃお金の面では話になりません。そういう現実があります。それとバリアフリーの話なんですが、一つだけ介護保険制度で疑問に思ってることがあります。これはうちのワーカー彼女たちの疑問ではなくて、制度の問題なのですが。例えば東京在住の方が伊勢志摩に旅行に来るとするじゃないですか、するとバリアフリーセンターのサポートが完備しているから、ツアーセンターを利用してホテルまで何とかいけるんですが、日常の居住地を越えて介護保険制度は利用できないのです。実費支払いになります。同一人が東京にいるときは 1 割負担で利用可能だが、伊勢へきて観光ホテルに泊まると実費負担になってしまう。介護保険法によると、介護保険のサービスの提供は通常の生活の範囲内ということらしいです。旅行というのは通常の生活ではないという厚生労働省の考え方なんですが、じゃあちょっと待てよと。障害者、あるいは高齢者は旅行に行ってはだめなのか、というようなことにまでなってきますよね、話を広げていくと。こんな話だと高齢者の旅行というのは、

僕はしんどい話だと思ってるんです。もっと皆が主張すべきではないかなと思っている次第でございます。

[山本] ありがとうございます。

[野口] 大西さんの話とかも聞いたりしてみなさん、ジレンマという部分がすごくあるんだなと、私もあるんですけど。お二人の業種は私のほうは違って介護保険とかそういったところの管轄ではないようなところなので、また違う意味のジレンマというので、私たちの運営方法というのはアドバイスとかそういったものでお金をいただいたりするんですね。そのときに例えばさきほど言ってた企業でユニバーサルルームを作ったりするときにもアドバイス料という形で企業からお金をもらったりします。それで中身にはやっぱり他の企業、旅館とかでもバリアフリールームを作ったりするときにアドバイスさせてください、でもお金がかかりますということを話し出すと「うちそんな予算ないので。」企業だけじゃなく行政もそうです。行政なんかも新しく施設を作るとか道を作る。じゃあバリアフリーの視点で少し調査をしてください、見てください。でも、きたときに話はもってくるけれどもお金は持ってきてくれません。「見るのでそういう予算を持ってきてください」というと、「今回その予算は作ってないので、じゃあもう意見は聞きません」と帰っていきます。でもそのときに、お金がないからアドバイスできないわけじゃないけれど、近くにできるものがアドバイスなしでできてしまって結局使い物にならないものができてしまうというときはショックなんです。だったらタダでもいいからアドバイスしておけばよかったということは多々あります。伊勢志摩の周辺施設にも。そういうものがすごくジレンマであって、そういう当たり前のようにしてバリアフリーのアドバイスに対しての予算というものを作っていっていただきたいなということをすごく思いました。さきほど大西さんが言ったように助け合いの部分での旅館のヘルパーなんですけども、私たちもそれはすごく実感しています。普段だったらそんなにお金のかからないことなのに、旅館にくる、それで極端な話、東京からでなくても実際このヘルパー派遣の件で地元の方に体験していただいたことも何度かあるんですね。そのときに言ってたのが、例えば同じ鳥羽市内の人でも、鳥羽市内でお風呂、自分のエリアでお風呂に入らせてもらうときには保険がききますよね。でも隣の旅館に行ったときには保険がきかないんですよ。自分の家じゃないとだめなんです。すぐ隣なんですよと言ってもだめなんです。というようなことになるのがすごくおかしいなと思いました。旅行だけでなく、ちょっと温泉に入りたいとか、大きいお風呂にゆっくりと入りたいという方たちもいるので、そういう人たちにたまにはいいんじゃないか、毎日じゃなくてもいいんです、たまにはそういう機会があればいいのになというのはすごく実感しました。お風呂の件に関してなんですが、お風呂に入るということに対して本人だけが満足するわけじゃないんです。家族の方が一番満足してくれるんです。今までヘルパー派遣で何度か行かせてもらったときに一番喜んでいるのは実は家族だったりするんです。それは例えばあったのは、私ぐらいの年齢の筋ジスの女の子とお母さんと一緒に来られたんですけど、そのときにお母さんと娘さんはよく旅行には行ってると言ってたんです。でもそのときに、お母さんは旅行に行っても腰を痛めてて、女の子の介助ができないからお風呂に入れないのが当然できているんですが、お母さんはお風呂に入りに行きますよね。でもカラスの行水って言ってました。パッと入ってパッと出てくる。そのときに「あー良い湯だった」ということは言えないと言ってたんです。入っ

てない娘に対してね。でもそのときにヘルパー派遣で利用していただいた娘さんが気持ちいいお風呂に入ったあとにお母さんが言ったというのが「あー、これで私もゆっくりお風呂は入れるわ」っていうことを言われたんです。だからやっぱりそういうところを考えると一人だけじゃなくて、その周辺の人たちも気持ちよく旅行ができるというところから考えると、もっとこういうヘルパー派遣制度が気軽に使えるようになれたら、大西さんが言ったような制度が少しずつでもいいからこの辺にできたらいいなとすごく思います。

[山本]　ＮＰＯを10年続ける極意の話にしたいので、福祉の課題だけをあまり深めすぎるといけないんですが、思いとしては、こういう夢を長年続けているみんな持ってるんだ、ということ。出てきた話でキーワードとなるのはまず「食べていける実感」というのが非常に大きなキーワードとして出てきたのと、ＮＰＯをやっている中でいくつものジレンマがあって、特にここで出てきてるのはサービスというものに対するジレンマですね。ＮＰＯとしてサービスはしたいんだけど、活動していかなければならないときにそこに対価がつくかつかないかというところのジレンマがあるみたいな話が出てきてます。これからどんどん続けていきたいんですが、やはり会場からも聞きたいことがあると思いますので一度お話していただくのをとめて、最初の自己紹介の中にあったテーマの一つに継続するコツであったり、思いを持続するというところの極意はという話が何人かから出てましたので、自分たちが活動してきて継続するのにこんな心がけがあったよとか、こんな出来事がありましたよということでお話いただけることがあればぜひお願いしたいんですけども。

[伊井野]　僕も、ここの分科会は参加者が少ないっていうけど、僕はお声がかかった時は冗談抜きで若い人が多くて嬉しい分科会かなと思ったんですが今はとても残念です。でもやはり10年というけど、ここに集まっている人たちは、本当にＮＰＯを運営しているみなさんですよね。ただＮＰＯに関わるということじゃなくて、企業とかでもやはり組織って人・金・物っていうじゃないですか。だから自分たちが何をやっているかとか、やってきたかという話はどちらかというとどうでもよくて、団体の資料に収入割合をずっと載せるとか、そういうふうにちょっと工夫すればよかったね。参加資料として。10年間の会員の動向とか、寄付はどれくらい集まってどういう努力をしたかとか、そういうことが10年の値打ちなんじゃないかなと思って。何をやってるかとかいうことは、あまりこの場ですると「そうなん」みたいな話で終わる可能性があるなと思って。もう一つは人材の確保っておっしゃったですよね。どこも人材の確保というのはすごく大変なんですが、でもね、日本ＮＰＯセンターの山岡義典さんの代わりが、後継者として簡単に育つと思います？それからシーズの松原明さんって、もう来年１月１日から休眠に入るんですが、体がもたないんですよ。今、全国的に募金活動をしているんですね。なぜかというとお金を集める取り組みをしなくてもロビー活動をできるように、今数千万単位で募金活動をやっているんですが、やっぱり人って例えば子どもセンターの代表の後継者をどうする、

事務局長さんの後継者どうするとか、大西さん、僕の後継者どうする、そんなんできないと思うんです。はっきり言って。それでどこも困ってるんだけど、でも一人でやったことを 10 人とか 5 人とかでトロイカ方式でやれればいいんじゃないかなっていうような仕組みだけ僕らはつくっとかないといけないんじゃないかなというふうに思います。その話をぜひ大西さんに聞きたいんだけど、僕のような思いや僕のような生活を 20 年続けられるという人のほうが少ないと思うんですよね。僕はだいたい朝８時に仕事に出て、帰るの 11 時なんですよ。だいたい 15 時間くらい労働してるんですね。それで自動車の運転手から料理から帳簿つけから助成金の申請から、だいたい毎日 15 時間くらい働いてて、それで給料は 250 万くらいかな。だけどそれがなぜできるかというと、大西さんは自分の人生語ってて僕は語ってないけど、1500 万くらい稼いだ時期もあるから、お金じゃないんだよって言えるからやれるけど、それがないとちょっとやれないだろうなというふうには思います。稼いだことがなくてもお金じゃないよといえるような世の中づくりが正しいのか、もっと稼げるんだよということを言うのがいいのか、僕はそのあたりでちょっと時間的なギャップがあるから悩んではいます。やっぱり強烈なリーダーシップと個性とアイデアで、第一世代と言われている僕たちはやってこれたけど、これからの人たちって強烈なリーダーシップと個性ではやれないんじゃないか、というよりやってはいけないんじゃないかという感覚がしてるんですけど、大西さんそのへんどうですか。

[大西]　ちょっと伊井野さんと方向が違うなと感じているんですが。というのが、僕この 20 年やってきてこの活動というのが地域ですごく役に立つということがわかったわけです。僕は今、伊勢まごころの代表をしているわけですが、伊勢まごころをどうするっていうのではなく、僕の頭の中にあるのは伊勢まごころのようなところを三重県中に作ろうというのが僕の考え方なんです。ですから一つの団体が大きくなるということはあんまり意味を持っていない。それよりも小さな団体でいいから三重県中どこにいってもある、そういうネットワークを作りたい。これが僕の夢なんです。それでこれは次の世代ということもあって難しいといえば難しいけれど、軽く考えるとそんなに難しくないんですよね。介護保険制度、ケアマネージャーがどうとか、国保連に請求業務がどうのこうのとか馬鹿みたいにこういうことを考えてたらややこしい話になってくるのでね。助け合いそのものは、困ってる人を助けるだけの話なんですよね。マザーテレサじゃないけど、関心を持つことなんですよね。

[伊井野]　今そういうけど、時間でサービスを測ってお金になると、これまで、無報酬で行ったサービスを無報酬ならしなくなる、という現実があるわけでしょ。まごころのようには簡単じゃないということです。

[大西]　わかりました。それで出丸さんが室長のときの話なんですが、2001 年の 9 月 11 日にアメリカでテロがありましたよね。あの直後に出丸さんが室長をしていたときのＮＰＯの職員とアメリカに行ったんです。それで向こうの NPO 先進国のＮＰＯというのをつぶさに見せてもらったんです。そうしたら、ＮＰＯはアメリカが神様というようなことを言うけれど現実に行ってみると、確かにそういう側面もあるけれど、これはポートランドの話なんで

すが、その辺のおばちゃんが集まってきて子供の手をつないできて、それで子供を隣の部屋に寝かせて会議を始めるんです。会議を始めたとたんに赤ちゃんが泣き始めて「すいません、ちょっと待ってください」と言って隣の部屋の赤ちゃんをあやすわけです。どこかで見た光景だと思ってよく考えたら日本と一緒なんです。そういう意味で、ＮＰＯと地域の助け合いをするということは、そんなに難しいことではない。考えたら難しいんだけどね。そういうことで今、三重県中にＮＰＯのネットワークを張り巡らすという、そちらのほうの仕事に全神経を使っています。個人的には、うちの団体、伊勢まごころの仕事には全く関与してないしていないのが現状です。以上です。

[山本]　継続するコツとか後継者というテーマで今話していただいてますが、野口さんはいかがですか。

[野口]　私たちもやっぱりそれは意識しています。よく言われるのが、ツアーセンターを始めた当初に、ご存知の方もいるかもしれないですが、私がこういったバリアフリーの活動をし始めたのが今の主人である車椅子の男性と出会ったのがきっかけだったんですけど、うちの理事長が常に私の知らないところで言ってたのが「あの二人が別れたらツアーセンターはなくなるな」ということをよく言われたんですね。だから、そういう関係がなくなったらって言ってたんですが、そんなことないよって私は言ってたんですが。ですので、そういう意味じゃなくて、私たちが離婚したからどうだというのではなくて、確かに先ほども伊井野さんがおっしゃってましたが私たちみたいなことをやれるのは、じゃあ誰か代わりができるのかというと、私のこの給料で私の代わりをしてくださいってとてもじゃないけど人にお願いできないです。先ほどおっしゃられてた方、できたら就職先としてできるような環境を作りたいというのは私もすごく思うんです。先日中学生の体験就業体験みたいなのがあって、うちは就職先ではないですが、そういうのを体験してもらったんですが、その子は障害を持った女の子だったんですね。だから受け入れたというのもあるんですが、その女の子がもし高校へ行って、高校を卒業するか、大学行ってから卒業するかのときに、あの時、中学校のときに体験させてもらったところで働きたいと、もしかしたら言うかもしれないです。せめてそのときまでには、その子が入ってもちゃんと給料が払えるような環境を作りたい。私たちはどちらかというと障害者の雇用にもつながるんじゃないかなと思っているので、そこら辺を本当にやりたいなと思っているんですけど、そのためにはじゃあどうすればいいのかっていうことを今模索中なんですけど、ここできちんと運営できる方法をできたら、先ほど大西さんがおっしられたように私たちバリアフリーツアーセンターも、実は伊勢志摩だけじゃないんですよね。ほしいところはもっとあります。伊勢志摩の障害者の人たちももっと外に出たいわけですから、全国各地にある観光地に一つこういうものがきちんとモデルとして運営できる体制が作れれば、どこにでもできる可能性があるわけです。そういうものを作っていくために今は行政だけじゃなく、そういう企業にお金をもらったり、企業からお金をもらうためにはアドバイスをし、評価を得ながらやっていくという方法を考えているという感じなんです。だから継続というのは本当に重要なんですが、お金に関する継続というのは本当に大変なんですが、モチベーションに関しては聞かれると不思議なくらい私たちもモチベーションを保っているかなと思います。それはおそらく現場に近いからかなと思います。現場の人たちの生の声を聞いて、それによってモチベーションがあが

ったり下がったりしてますが、それがモチベーション持続の効果が高いと思ってます。

[山本]　所々で聞きたくなったら手を上げてくださいね。ほっとくとこのままずっと続いていきますので、聞きたい中身が聞けずに終わる可能性が出てきましたので、これは自分の言葉で質問しておきたいということがあったら今あげてください。

[参加者]　3 人の方の話をお伺いしてて、例えば野口さんのバリアフリーセンターだと企業や行政からいただくお金が収入の大部分を占めているんですか。その収入の構成割合。それから大西さんのところだと事業収入ですよね。事業収入以外に助け合いの部分はどの程度あるのか。伊井野さんところの場合だと、助成金の割合が高いのかな。その割合と、それ以外だとか、事業収入ですね。その様子をちょっとお聞かせいただきたいです。それでみなさんの給料はどこから払われてるのかというのを知りたいです。

[伊井野]　うちは年によって事業の総額が違うのですが、だいたい 2000 万から 2500 万ぐらいで、デイサービスが 7 割 5 分くらいから 8 割で、助成金が 2 割 5 分くらいで、あと 0.5 分が会費とか寄付とか、それくらいですね。それで会員さんが 100 人前後で、けっこう若い人はいっぱい入ってくれるんだけど、本当は会費を 1 年でも滞納したら除籍するんですが、だいたいみなさんの慣例という 3 年は残しておきます。3 年は残して、4 年目になったときにみんな切っていくということをどこでもしているというのを聞きますが、うちは入ってくるけど抜けるからいつも 100 人なんです。それはどこから始まったかというと 300 人から始まって、10 年経って今、3 分の 1 に減ったけど、それでも 300 人から 100 人で、3 分の 1 止まりでよく残ってるなと思ってます。しかも悪いことに、永年会員というのがものすごくあって、100 人のうち 30 人が永年会員だから会費が入ってこないんです。初めは良かったけど。だから 3 分の 2 だから会費というのはそうたいしたことじゃなくて、ちょっと運営は会費で事業をするというのはなかなか大変で。寄付のほうもたまに 100 万とか 200 万というような寄付はあるんですが、定期的に企業からというのはこれからかなと思うので。助成金は多いときは 600 万、700 万、1000 万近いときもあるし、取らないときもあるしということでけっこうフレキシブルなんですが、そんなとこでうちは運営しています。

[大西]　お金なんですが、頭の中に入ってる数字だけで申し訳ございません。うちは介護保険をしていまして、あまり力を入れてるわけじゃないんですが、うちの中でいろんな事件がありまして、介護保険でずっとやってきたんですが、そうしたら介護保険は儲かるということで会員さんがやめてしまって、有限会社を立ち上げてるというアクシデントがありました。それ以前は、うちは介護保険制度では訪問介護、居宅介護支援とデイサービスだけをしているだけなんですが、そういう事件がある前はかなりの額の売り上げがあったんですが、それがおきてからは会がすごく小さくなってしまって、訪問介護員が少なくなった今では 6000 万ぐらいが介護保険のほうで、助け合いのほうで入ってくるお金は 200 万あまりだったと思います。

[伊井野]　ＮＰＯ法人ではありがちなんですよね。

[大西]　有限会社で開始した方もＮＰＯでやってくれると良かったんですけどね。僕の指導力が足りなかったんだということですね。

[伊井野]　そんなことがあったの。その話が聞きたいじゃないですか。

[大西]　外から見ている皆さんは、介護保険は儲かると思うんだよね。

[伊井野]　儲かりませんよ。経営者の人件費を抑さえるからやれるんだよね。公務員の皆さんの給料を考えたらやれないでしょ。やれないことをやれって言ってるわけですよね。

[野口]　私もちょっと頭の中にある感じで。みなさんの金額を聞いて私は全然違う次元なんですけども、私たちの一番最初の始まりは県の特異なプロジェクトで始まったといいますが、そういうことはみなさんご存知のように補助金というのは限りがありまして、4 年めくらいでばっさり切られてます。それ以降は自主運営をさせていただいてるんですが、聞いてびっくりしちゃいけませんよ。私たちの年間の運営費っていうのは 500 万ちょっとくらいです。それだけで事業代と 3 人の人件費がまかなわれてます。最近ちょっと切り崩し方式の借金なんかもしていて、そのことを含めるとどういう割合かというと借金のほうが多いと言ってはいけないし、そうわけじゃないですが、最初のころはけっこう行政の委託事業とかもいただくことがあったんですが、やはりそんなに続かないです。委託ばっかり受けてると癒着じゃないかというようなことも言われたりするとだんだん離れていくので、今現在としては行政の委託もありますが、鳥羽市の観光サポートの 2 分の 1 助成とか、そういう委託とかもちょっとありますが本当に小さなものであったり、商工会議所の委託であったりとか最近ちょっと出た学校の方も授業代ってすごく安いですよね。1 日行っても 2 時限やっても 4000 円くらいだったりするんですよね。それでもとりあえず人材をということで関わらせてもらってたりしますが。先ほど皆さんもおっしゃられてたみたいに年によって本当に変動があります。私たちは 500 万前後というのは変わりませんが、時々大きな財団とかの助成金とかバッともらったりすると跳ね上がりますが、でもやはり 1000 万を超えるというのはまだ私たち今のところないですね。その中でやりくりしていってますので本当にこの私たちの 500 万っていう数字はすごく少ないのか。この中でたぶん人件費というのは 300 万くらいかなというくらいです。その中で 300 万を三人で割ると計算してもらったらわかると思うんですが、そんなかんじでやらせていただいて、もうちょっと本当は企業のほうからお金をもらっていきたいなと思ってますので、情報発信を私たちしてますので広告料のようなものをもう少しとっていきたいなということなので、あまり参考にならないかもしれないですが細々と灯火でやってるという感じです。

[大西]　そんなにお金はないんですが、ＮＰＯとしては多少あるのかなという感じなので、うちは助成とかそういうことは全く応募していません。というのは、お金がないところにそういうのは回してもらったらいいのかなと考えています。それと、その代わりにやることといったら、例えば今福祉有償運送という制度がありますが。ああいうことにうちが助成をもらって、うちのほうで研修もやりよそのＮＰＯでは出来にくい活動、そういうところで助成を頂くようにしています。例えば成年後見制度でもなかなかよそのＮＰＯにやれと言っても難しいので、それにはこちらから助成してくれるところを探

し市民にも実現可能なものにしていくという努せん。

[伊井野]　やっぱり聞いてよかったです。山岡さんは今日しゃべってましたけど、この間セクター会議といって、何が議論されるかというと日本のＮＰＯ法人の中のほとんどは 300 万～500 万ぐらいのレベルが 7・8 割いて、福祉系は金額がグッと跳ね上がるけど、それは出るものも同じくらい多いわけで真水を見ればそんなに変わらないということの中で、やはり 500 万ぐらいのレベルのＮＰＯをどうやって助けるのかとか、支援するのかという話が行政の課題じゃないかというのがずっとあるんです。だからちょうど良い例なんですよね。その 500 万を 1000 万くらいにできるアイデアをみんなが提案するとか、提案しあうとかすることの中で取り組むということがとても大事じゃないかなって。いろんなところで会って話をしているから中間支援みたいな立場でどうしても見てしまうんですが、今エコツーがすごく盛んでしょ。だからエコツーがあんなに盛んな中で、こういうバリアフリーのツアーっていうのを一緒に抱き合わせで、国のレベルでもっと働きかけをするとかいうことになると、もっといい流れが来るんじゃないかなと思ったりしますけど。

[山本]　エコツーってわかります？大丈夫ですか？他の人でも質問があれば聞いておきたいんですが、ないですか。

[会場]　先ほど伊井野さんからのお話で、そういう活動されて、継続するに当たって心構えというか、こういうふうなことをしたほうがいいよとかのアドバイスがあればですけども、こういうことに気をつけなければいけないよみたいなことがありましたら教えてください。

[伊井野]　今日の感想ですが、山岡さんの今日の講演はとてもよかったなと思って。あれだけ参加を言う人ってないですよね、ＮＰＯの世界の中で。僕は何十回も話を聞いてますが、参加っていう感覚を行政職も持たれたらどうかなと思って。行政職が持ってる週休二日と年休をあわせると 3 分の 1 くらい休んでません？ごめんなさいね。1 年のうち 100 日くらい休んでるんじゃないかなと思うんですよね。3 分の 1 休みがあるんだったら、十分立派なＮＰＯってできるんじゃないかなと思うわけです。だから本業がどれくらい後を引くのかわからないけれど、というのは僕は行政職をやったことがないので。ＮＰＯ職って 365 日ＮＰＯ職じゃないですか。行政職って 365 日行政職になれます？例えば寝てるときにおじいちゃん、おばあちゃん、バリアフリーの車椅子の人のことが頭に浮かんだりします？しないでしょ、わからないけど。しないんだったら、もう一つ仕事が持てるんじゃないかなと思うんです。だから参加から協働へという、個人から団体への取り組みを十分にできる行政の職員の人たちが、本業を持ちながら社会とどうかかわる、参加するのかというところでいうと、ＮＰＯを立ち上げるというか参加して、自分が主体になった行政職の見本を見せることによって「見てみぃや、市民ってこういうことを言うんやで」って。市民と住民っていう言葉がありましたよね、山岡さんの話で。行政職のほとんどは住民、ごめんなさいね、思い込みで言うんだけど。市民になる行政職というのをお手本でやられたらどうかなと思いますがいかがでしょうか。

[大西]　その人それぞれ十人十色だと思うんです。できることが。現実の厳しさということを知ることだと思うんです。例えばちょっと考え方違うと思うんですが、国土交通省が向こう十数年の間に日本から村が 2000 余り消滅するだろうと。限界集落のことをいいましたよね。限界集落なんてよそのことだと思ったら大間違いで、私のまち伊勢なんかは、固有の名前を出すとあれですが、高麗広とか横輪という地区があるんですがこういうところはすでに限界なんです。じぃちゃんばぁちゃんしかいない。病院がない、飯を食うところもない。何もないないづくしなんですよね。地域で助け合って生きていくしか方法がないんですよね。その中でどういうふうにその活動を維持継続するかが問題です。なんだかんだ言っても始まらないんです。そこでこちらがどういうふうに石を投げて波紋を広げていくかということが大切。なんだかんだと悠長なことは言ってられないと思うんです。高齢者、障害者に携わっていると。皆の問題です。以上です。

[野口]　私たちの活動は実はじわりじわりと行政の方たちに参加をしてもらおうと思って、私たちは伊勢志摩を広域的に活動しているんですが、鳥羽に在籍しているので鳥羽市の職員の観光課の人に調査しに行くときに暇だったらついてきてみたいに現場に来てもらうようなことをしてもらっています。それによっていろいろ勉強になったわとか、知ったわというようなことかもあって、実は最初の方で行政が変わってきたことはというのをご質問されていた方がいらっしゃいましたが、私はまだここで始めて６年、7 年ですが、すごく変わったと思うんです。今までちょっと前までは社会福祉協議会が地元にはどこにでもありますが、社会福祉協議会に「すいません、旅行者の方が車椅子を」どこでもチェアという車椅子ができるまでは「車椅子を貸してほしいという方がいるんですけど貸してもらえないですか」と言いに行ったときには社会福祉協議会からは「社会福祉協議会は、地元の方のための社会福祉協議会なので観光の方には使えません」みたいなことを言われたんです。使ってるわけじゃなくて、そこにいっぱいあるんですよ。いっぱい並んでいるのに、その 1 台も貸してくれなかったということがあるんです。でも、この数年間の間でものすごく変わって、車椅子は貸してくれるし、観光の方たちのためにと観光客向けのサービスもできてきてるんですね。サポート何とかというのができて、有料なんですが、時給 600 円くらいのものですがそういうサービスをやっていただいたりとか、あと今まで観光と福祉というところがあまり一緒に話をすることがなかったんですが、私たちの会議で呼ぶ人は必ずそういった人たちを入ってもらうようにしているんですね。環境と福祉、場合によっては建築とかいろんな人たちに来てもらったりするんですが、そういう意味ではちょっと緩やかですが横のつながりというか、今まで縦割りだったものがちょっとじわりじわりと浸透してきているのかなという実感があります。それで行政の方たちが一番悲しいのは、そこの担当を抜けてしまったときに「はい、さようなら」ということがあって、それからどこに行ったんだろう、三重県の人だったら北勢の方に行ってしまったんだけど、どうなったのかなという感じになってしまうことが多いので、とっぷり活動しなくてもいいんですけど自分にできることですよね。自分が今している仕事のときに、このＮＰＯに対して自分はどんなことが手を差し伸べられるかなということを常に意識してもらったら、どの部署に行っても「この部署にきたからこれができる、あそこの団体が助けられる」。本当にちょっとしたアドバイスだけでいいんです。今こういう助成金を募集して

るよみたいな感じでもいいですし、そういうことがさりげなく話をしていただいたらいいなと思います。

[山本]　あと 10 分なんですが、ちょっと会場でこれは聞いておきたいということはどうですか？大丈夫ですか？無ければ、ちょっと私の進行が悪かったのかＮＰＯが行政に期待することみたいな話になってきつつあるような気がし若干違和感があるので最後にこういう質問で、みなさんから一言コメントをいただいて終われればなと思います。じゃあ市民は変わったのか。この 10 年間活動する前と後で、みなさんがサービスを提供する人たちでもいいですし、参加してくれる人でもいいんですが、市民は変わったのかな、市民はどういうことをこれから訴えていたきいのかな。そういう言葉で最後を締めていただこうかなと思うんですが、伊井野さんからでも大丈夫でしょうか。

[伊井野]　その前に、熱意が継続できた理由とは何かという話で、やっぱりやっている事業が全国の基準、つまりモデル事業をやっているという意識を常に持って。例えば赤目で成功すれば、よそでも通用できるという、このモチベーションはものすごく、俺しかやってないんだというモチベーション、インセンティブになりますね。ここで成功すれば全国、だからさっきの一般廃棄物の街路樹の処理でも「あー、また○○新聞の良いところに載れる」とか。まぁ冗談ですけど、そういうモチベーションって背筋が冷たくなるくらいの快感がありますね。実を言うと昨日の夜は、ご近所の底力という番組ありますね。残念ながら三重県は 27 日の朝放送なんですが、関東で昨日放送だったんです。それで、私は和田アキ子さんと 11 月 22 日に話をしてきて、収録があって出たんですよ。それで昨日の夜からずっと問い合わせの電話が相次いで、転送にしているんですが、幸いにも今かかっていないんですけど、そういうモデル事業としてのインセンティブというものというのは日本を動かす一つなんだなということがね。かけがえのない喜びであり、やる気、モチベーションにつながるということが継続的にやれるコツなんだろうなと思います。大西さんも、自分のまごころはまあまあだけど、そういうあり方をずっと日本全国に広めたい、つまりモデル事業ですよね。野口さんもモデル事業だ。やっぱりそういう意識でどうやって共通項を取り出して、世の中のありとあらゆるところの仕組み作りに貢献できるのかということが大きなモチベーションになるんだろうなというふうに思っています。ですから、そこで食べられる、食べられないというのも大事ですが、そこで食べられるということは全国で食べられるんじゃないかなという共通項で結べられるということがモチベーションになる、かけがえがない。それがＮＰＯの命じゃないかなというふうに、僕自身は思っています。

それでお尋ねの市民はどう変わったかというのはわかりませんね。まだ住民の人がほとんどじゃないかなというふうに思って。僕は 0.01％、1 万人に 1 人環境運動ってずっと言ってるんですが、あまり最近はもう変わらないと思っています。つまり、里山の保全をやりますよとけっこう新聞でチラシで呼びかけても、だいたい 1 万人に 1 人しか集まらないんですよ。10 年間しても、そう大して変わらないんですよね。そういう意味で言うと。だから自覚した市民の形成というのは、たかだか 10 年くらいでは変わらないし、これからやっぱりこうじゃなく、もっとこういうふうに変わっていくんじゃないかなと

いう感じがしてね、これからますます頑張っていかなきゃならないんじゃないかなと思っています。

[大西]　市民が本当の意味で変わったのかというならば、残念ながら旧態依然として変わっていないというのが現実だと思います。この問題は、非常に難しくって出丸さんが室長の頃のように、すごくエネルギーを感じるようなＮＰＯ活動の時代でもなくなってきたなという気がしないでもありません。それで、市民が変わってきたか、市民はどうなんだと言われるとちょっと辛いところがあるんですが、しかし何をするにしてもお金がいるんですよね。そのところを握っているのは行政です。市民でやりなさいよ、自分たちでやっていくのがこれからの社会じゃないかと。このような依存型社会にしてしまった彼らの責任には言及はしません。しかし、責任の追及をしても解決にはなりません。これからは共助が大切な社会です。僕は行政の方がやっぱりお金の配分をもう少し考えてくれたら、もっと市民は育つ。変わるんじゃないかと。行政も変わらなければならない。市民の自立を阻害しているのは相変わらず指定席ばかり狙っている行政じゃないかというような気がしないでもないんですが、いかがでしょうか。依存型住民、自立型市民の話にももう疲れました。

[野口]　私たちは、私たちの活動に対しては、市民はすごく変わったのかなと思います。実際最初のころは風当たりが強かったというか、何が始まったんやろという感じで、あまり私たちの活動も理解が乏しかったんだと思うんですが。どうやって市民の人たちに私たちの活動を理解していってもらったかというと、一番手っ取り早い方法は、私たちもやってきたことなので、ぜひみなさんも活動には使ってほしいんですけど、さっきの伊井野さんも同じこと考えてるなと思ったんですがマスコミを使うことですね。これはお金を使わずパブリックな記事に載せてもらう。そのためにはどんな活動をしたらいいか、どんなイベントをしたらいいかということもけっこう考えます。これだったらマスコミが飛びついてきてくれるなというようなことをどんどん出していくんです。それによって私たちは活動していることを宣伝したい、というか活動していることをみなさんに自然と入ってきてもらいたいと思っているので、それはけっこう成功したかなと思います。この数年間の間でものすごくマスコミにも、これでもかというぐらい取り上げてもらうことによって市民の人たちは「伊勢志摩ってバリアフリーに力を入れているんだ」ということをたぶん徐々に気づいてきていると思っています。それもあって、先ほど紹介もありましたが車椅子のレンタルってけっこう徐々に上がってきてるんですが、その中で突然いらっしゃった方とかに「どこでお聞きになったんですか、この車椅子の貸し出しは」と聞くと「さっき歩いてたら町の人に聞きました」と言うんです。それはおそらく話の内容からいくと、お客さんが車椅子を使わず、ちょっとおぼつかない足で歩いているときに町の人が「あちらに行ったら車椅子の貸し出ししてますよ。どうですか」ということを声かけていただいた。それは、こういう障害者の方たちが観光に来られるって「そういえばあの時新聞で、バリアフリーツアーセンターが車椅子の貸し出しをしてるって言ってたな」ということがつながって紹介してくれたと思うんですね。たぶん本当に数年前、私たちが始めるころだったら誰もそんなこと気にもとめてくれなかったと思うんですが、そういう点からいくと徐々に浸透していただいて、本当にちょっとずつですがそういうような形では変わってきたのかな、もうちょっとそれが広がっていくといいなというのが私の希望です。

[伊井野]　この間静岡であった、ＮＰＯ行政フォーラムのときも僕は思ったんですが、それでここ行政職が 3 分の 2 くらいいるじゃないですか。それで山本さん市民は変わってきたかというと、まぁみなさんが市民とするとこの業種について、またいろんなところでこれから出世していくわけですが、ＮＰＯ室にいた職員はやっぱりこう違うよということって、僕はそれを期待したいわけ。だから 30 年ぐらい経つと全部ＮＰＯの担当をした人たちが行政庁の中のほとんどの部署にいて、それでちょっとはましに、ごめんなさいね、つまりＮＰＯの気持ちがわかる、心がわかる行政職がだいたいを占めてくると変わるように思いません？僕はそれを期待しているんですが、それは行政職であり、一般の市民が変わったかどうかという山本さんの質問に、まさに答えられるんじゃないかなと思うんですが、そういう質問ってどうです？変わりました？

[会場]　意識は変わりました。変わりましたというか、今まで接点がなかったのでカルチャーショックを受けました。

[伊井野]　もういろんな部署に行って、今までと違う行政職の仕事ができそうだという意味ですよね。僕の期待はかないませんか？

[山本]　なかなか難しい質問ですね。ちょうど時間がきてしまっているんですが、みなさんわかっていただいたように、ほっておいたらどんどんしゃべってくる人たち、この熱意っていうのがやっぱりまずＮＰＯの活動の原動力なんだろうな。すごいなと人が素直に感心できる原動力というのは、おそらく活動内容如何に関わらずＮＰＯの原動力なんだろうなということを私はつくづくと感じる一方、進行役としてはやりにくくて、こんな人たちとパネルディスカッションはしたくないな、一人でしゃべったほうが楽だなとつくづく思ったりしました。もう時間なので本当に申し訳ない。これで結論が出てるというか何がわかったんだろうな、何がつかめたんだろうなというような流れになっちゃったかもしれないですが、みなさんパッと振り向いてみてください。こんなに閑散とした会場が熱い。というところが、たぶんＮＰＯを続ける極意の一番大きなところなのかななんて、ありきたりな締めで恐縮ですが。宣伝をしたいことがある？やめさせてくれない参加者ですので、じゃあわかりました。最後に 2 分ずつ一言。

■　メッセージ

[伊井野]　それはあなたも言いなさいよ。あなたも 10 年やっている人だから。

[山本]　いえいえ、私はいいです。一人 2 分ずつＰＲショータイムをして終わりたいと思います。

[伊井野]　僕は今日、このような総論の分科会でいろんなことをみなさん学んでいただいたらいいなと。少なかったら少ないなりにいろんなことを学べてよかったなと思っています。どうだったかはわかりませんがＮＰＯってやっぱり地方自治の学校だってよく言いますよね。民主主義が議会という形で貫徹しても、それで世の中が幸せになるわけではなくて、場面場面でい

ろんな疑問が生じたときにぶち当たった住民たちがそれを乗り越えるために立ち上がる運動が世の中に満ち満ちれば、世の中は豊かになり社会変革がおきるというのが原理原則ですよね。ＮＰＯの考え方として。だから世の中のぶち当たる場面をたくさん作って、熱き思い、初心の善意とか言いますけど、その思いをやっぱり共有しながら僕はいつも交流したい。交流って３年ぐらいしたらもういいよねって言うけど、やっぱり大西さんと久しぶりに会ってすごく嬉しいし、山本さんってどんな人だったかなって思うし、やっぱり交流ってずっと大事だから３年に１回ずつみんなに会いたいなと思います。以上です。

[野口]　私もちょっとちらっと、今日の講演でも先生がおっしゃってましたけど、「気づき」ってすごく大切だということを言ってまして、私もそれだと思うんです。さっきも大西さんが言ったみたいにほっとけないというのと一緒で、気づいてしまって見て見ぬふりができないというのが、たぶんＮＰＯをしている人たちのみんなの形なのかなと思います。だからやっぱりそういったところのいろいろな面で気づいてるところで見て見ぬふりとか、目をふさいでしまうことがあるかもしれないですが、そこをちょっと一歩踏んでもらって、何か行動に起こしてもらえると嬉しいな。みんなが行動を起こせばきっと町は良くなっていくと思います。それで宣伝なんですが、すいません、私の活動の 19 ページにもちょっと載ってるんですが、「恋に導かれた観光再生」ってうちの理事長が書いた本なんですが、このバリアフリーセンターがどうしてできたかということとか、ＮＰＯのこととかを書いた本なので今日数冊持ってきてますので 1470 円ですので、もし必要な方は、読んでみようかなと思う方は私のところに終わったあとでもけっこうですので、声をかけてください。よろしくお願いします。

[山本]　ということで、長いつもりだったんですけど短い時間になつてしまいました。もっと聞きたいことがあったと思いますが、この機会をぜひチャンスと捉えて交流をそれぞれの方としていただればなと思います。最後にパネリストとして話をしていただいた 3 人の方に拍手をしていただきます。ありがとうございました